

御草庵

下田冷涙

天に華咲き地に果なる
靈鷲の峯や日域の
比叡の山にも勝るぞと
宗祖大士ののたまひし
身延のみ山の尊しや
雲の姿も鳥の音も
吹く松風の音までも
みな妙法の響きあり。

□

ときは文永十一の
皐月なかばの事なりき
鎌府をあごに上人は
六老僧を始めとして
俱奉の信徒も數多く
身延の山へわけ入りて
草の庵に棲みたまふ
ときに御歳五十三。

□

仰げば秀峯青蟹は
天を劃りて聳え立ち
嵐を聯ねて暉を含くむ
腑して足下を望むれば
庵をめぐる清流は
實相眞如の月浮かべ
無明深重の暗はれて
法性の空に雲もなし。

□

塵滓を脱し玄冥に
身を遁るるの思ひあり
妙法讀誦の御聲は
梢をわたる風と和し
轉法輪の凡音は
河の流れともろごもに
久遠に傳へて今もなほ
廣宣流布の利益あり。

□

軒は崩むき柱くち
四壁おちたる庵室は
夜半に燈火なけれ共

棟にさしこむ月光を
便りに御經讀み給ふ
吹き入る風は御經を
繰りて讀涌を扶ける
あゝたふとししや大上人

□

嵐はげしき折りくも
霧立ち登る山嶺に
登りて薪ぎ取り給ひ
草露ふかき寒む空に
深澤に下りて芹をつみ
流れも早き山川の
岩瀬に立ちて菜を濯ぐ
死身弘法ぞたふとしや

□

落葉くの色深かく
月日は流るゝ水の瀬か
弦をはなれし鎗矢か
こゝに六百五十年
今に傳へて西谷の
御草庵とは申しける

あゝ神境か靈境か?!
此處ぞ大士の栖なれ

□

紅ひに咲く裏山に
紅葉踏み分け啼く鹿の
聲は聞かねど山門の
夜半の嵐に誘われて
月下に立ちし吾れは今
大七のみあと偲びつゝ
杜撰なれども一篇を
草して諸子に見へなん

月の囁き

中林蓮風

塵の子も
今は早や、
尊い嚴かな
眠りの神に護られて、
遠い遠い天國へ
登り行く。